

「**学**ぶ」ということ

記者の仕事で大切なことのひとつは、分からないことを人に聞くこと。勇気がいることかもしれない。そこを「えいっ」と飛び越え「分からないので教えてください」「これを見て、どう感じましたか」と聞いてみる。そうすると、「こういう見方があるんだ」「なるほど、こういうことだったのか」という感動と出会うことができる。この出会いがもたらすものは、「世の中には自分の知らないことがたくさんある」ことを思い知らされること。だから、もっと知りたくなるし、もっと聞きたくなるし、時に自分が情けなくなる。世界の大きさに触れることができる「びとこま」の活動は、子供たちにとって大きな学びとなるはずだ。

まっすぐな感性で書かれた記事はまた、「びとこま」読者に「こういう見方があるんだ」という新しい視点を与えるだろう。子供と大人、学ぶ側と教える側、相互の豊かな感性の交流の先に、たくさんの喜びが生まれることだろう。

紙の街の小さな新聞社ひらく 記者 山田 香織



メルボルンだより

Hi!! びとこま編集をしてみた おぢんです。
 もうすぐ9月、メルボルンは春めい、あちこちで桜が咲き、スーパーのBBQグッズ売り場も広々目立つようになりまして。オージー(オーストラリア)は、北海道にも負けないBBQ好きです。
 さ、今回は、あるアート本のお話。イギリス在住のアーティストにまつ子ども向けに書かれたこのアート入門書、その名は「**why is ART full of NAKED PEOPLE?**」日本語だと「**どーしてアートの人が裸だらけ?**」どおみなのなかなかなるぞは、タイトルにひかれて買ったこの本。内容も良くて、「日本語版はあるのかしらん？」と聞いたら「ありました! 同じ作者、同じ表紙。でも...タイトルは、**美術、裸のあに?**」どーして!! 日本語版を作る時に、タイトルを変えしめた理由が気にな、て仕方ないおぢんです。

編集後記

今年度、新しいメンバーも加わって初めての発行です。初めてのメンバーといってもすでにみんなびとこまのエース記者です。ゆっくり時間をかけて、じっくりと作品を見るのが特徴的で、これは簡単なようでなかなか難しいこと。じっくり見ている間は頭の中もフル回転しているようで、鑑賞後の記事にまとめるスピードには驚くばかりです。
 いろいろな作品や活動に興味を持ち、またそれが別の興味につながっていく。いまが未来につながっていくような記者たちの笑顔や真剣な眼差しが美術館の魅力とともに読者にも伝わるような紙面をお届けします。

藤沢 レオ

びとこま 第24号(2018年10月発行)

【執筆】子ども広報部「びとこま」(阿部多香子、小川さくら、小山鈴乃、深澤乃愛、綿貫里咲、苦小牧市美術博物館、NPO 法人樽前 arty プラス)

【イラスト】子ども広報部「びとこま」、藤沢レオ・小河けい (NPO 法人樽前 arty プラス)

【紙面デザイン】堀米和克 (NPO 法人樽前 arty プラス)

【編集】苦小牧市美術博物館、NPO 法人樽前 arty プラス

【発行】苦小牧市美術博物館 (苦小牧市末広町3丁目9-7)

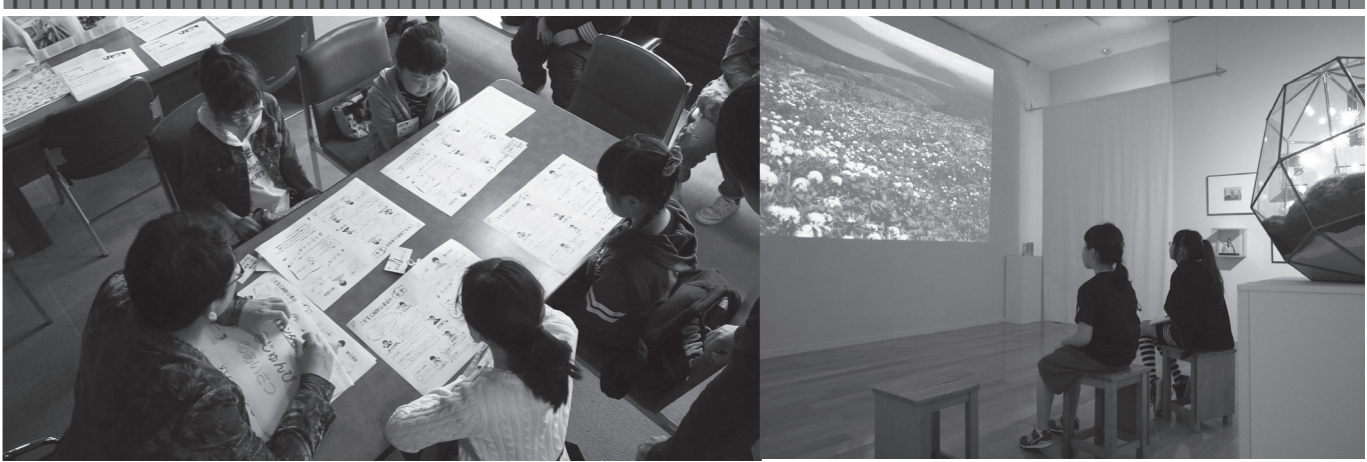
苦小牧市美術博物館の魅力を伝える

びとこま



特集 うたがわ ひろしげ **歌川広重**

ふた とうかり とうご じゅうさんつき **『二つの東海道五拾三次』**
 ほ えい とうばん まる せい ばん **保永堂版と丸猜版**



企画展「『風の生涯』と勇払」

2018年4月28日～7月1日

かぜ しょうがい 「風の生涯」って？

みひと そうぞう
見る人に想像させるー

さか い のぶよし さくひん
酒井信義さんの作品



10～20年ぐらゐ前に日本経済新聞に掲載されてた小説。辻井喬作、酒井信義がさし絵を描いている。水野成夫さんが主人公で、昭和の当時の経済状況がわかるような話だ。

この展覧会では、酒井信義さんの作品を展示している。《野の花》という作品は、油絵で、下から見るときらきらして見えた。酒井さんの絵ははっきりとは描かず、見る人に想像させるような絵であった。私の特に好きな絵は、《噴水》という作品。灰色の紙に白い細い線で正確に描いていた。赤茶の線もまじっていて、とてもすてきだった。

(小川さくら)

苦小牧の産業史の重要なひと幕が盛り込まれた『風の生涯』は、1998年から2002年にかけて日本経済新聞で連載された辻井喬(1927-2013)の小説です。主人公のモデルとなった企業家・水野成夫(1899-1972)は、昭和の経済界をリードした有名人。彼の友人で同じく企業家の南喜一(1893-1970)と協力し、大日本再生製紙株式会社の工場を苦小牧市内南東部に位置する「勇払」に設立する場面は、物語の見どころであり鍵となります。展覧会では挿絵のほかにも、苦小牧の工業都市としての礎を築いた登場人物の肖像彫刻をはじめ、映像、写真、手紙、書なども紹介することで、歴史、文学、芸術の側面からその発展のありように焦点を当てています。



主任学芸員 細矢 久人

ゆうふつ わ 「勇払だとすぐ分かる」

《野の花》という作品は、油彩である。主にむらさき色が使用されている。他には、黄緑、赤、クリーム色など。

他の作品では、月の描き方に特徴があるものがあつた。月の部分をのこして描いている。波は、光を表すために白い部分があつた。あゝ一人に取材した。「子どもが興味があるといふので来ました。勇払の風景とすぐわかります。」と話していた。

(綿貫 里咲)



2018年4月28日～7月1日

廣田良二蝶本コレクション

たよう ちよう 多様な蝶、それぞれに個性

蝶には「シジミ」「チョウ」「ヒョウモン」「ムラサキ」「ヒカゲ」などの言葉で終る名前が大半を占めていた。小さいのから大きいものまでいる。約1cm～7cmぐらゐだ。色も黒、黄色など多様な蝶がいる。同じ種類でも、色や形などが全て同じではやはりなく、それぞれに個性があつた。

(小川さくら)



なぜ、^{ごじゅうさん}五十三なの？

ひ 秘められた「昔の生活の物語」



うたがわひろしげ とうかいどう ごじゅうさんつぎ うきよえ うきよえ えどじだい ふだん せいかつ えが ごじゅうさんつぎ
歌川広重の東海道五十三次は、浮世絵です。浮世絵は、江戸時代の普通の生活を描いたものです。五十三次とは、「ごじゅうさんつぎ」と読みます。なぜ五十三なのかというと、江戸（東京）から京都にいたるまでの道のりに五十三ヶ所の宿のある町があったからだそうです。この東海道五十三次には、その五十三ヶ所の宿場町の様子や風景が描かれています。

とうかいどう ごじゅうさんつぎ かわ みずうみ き やま じめん たてもの ようす とくさんぶつ げんたい ようす ひかく みどころ
東海道五十三次は、川、湖、木、山、地面、建物の様子や特産物などは、現代の様子と比較してもあまり変わりません。見所である富士山は、写真で見るとより大きく描かれていました。それも絵の魅力だと思います。

とうかいどう ごじゅうさんつぎ とお まち ようす し おむし ぼうぼう せいかつ しゃしん
《東海道五十三次》は、遠くにいながらも、町の様子などを知る昔の方法でした。昔はインターネットや写真もないので、こういった浮世絵はとても便利な情報だと思います。浮世絵には、昔の生活の物語が秘められているのだと思います。作品を見ていると、東京から京都まで旅をしているような気分になりました。

(深澤 乃愛)



特別展

うた がわ ひろ しげ 『歌川広重』

ふた

とうかいどう ごじゅうさんつぎ 二つの東海道五拾三次

ほ えい どうばん まる せいのばん 保永堂版と丸清版』

2018年7月14日～9月17日

うたがわひろしげ ひど 歌川広重ってどんな人???

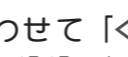
うたがわひろしげ おかし うきよえ し えどじだい ひとたち ふうけい
歌川広重とは、昔の浮世絵師である。江戸時代の人達のくらしや風景を描いていた。本名は「安藤重衛門」という。「歌川」というグループに所属し、「広」は先生の名前で、「重」は自分の本名からとって、「歌川広重」という名前にしたそうだ。15才のときに浮世絵師になる。だが、ヒット作がでなかった。

それからしばらくたち、ヒット作がでる。それは《東海道五十三次》という作品。東京から京都までの人々のくらしや風景を描いたもので、旅をしない人でも、そこはどんなところなのかを知ることができた。

ほ えい どうばん まる せいのばん
保永堂版と丸清版にはちがいがあ。保永堂版は、37才のときヒットしたもので、丸清版は50代に描いたものである。

(綿貫 里咲)

ひろしげ 広重マーク

ひろしげ
広重マークは、カタカナの「ヒ」と「ロ」を組み合わせて「」。これを「広重マーク」という。色々な作品にかくされている。

(綿貫 里咲)

うたがわひろしげ え えが かた 歌川広重の絵の描き方

うたがわひろしげ ひろしげ あお
歌川広重は、「広重ブルー」とよばれる青色を、水の色などに使っている。細かい部分まで色をつけている。雨は黒い線や白い線で表している。草は「v」で表している。水の色は、灰色を使い、明暗を表している。

(綿貫 里咲)

うきよえ え 浮世絵ってどんな絵?

うきよえ えどじだい しょうみん み たの ほんが げんざい げっかんし たと
浮世絵とは江戸時代の庶民が見て楽しんだ版画で、現在の月刊誌などに例えられます。広重は、もともと武士の出身でしたが、15歳で歌川豊広に弟子入りします。デビューしてから長い間ヒット作に恵まれませんでした。37歳の年に出版した「保永堂版東海道五十三次」は江戸っ子の間で大人気となり、一躍人気絵師となりました。作品は53の宿場町とスタートの日本橋、ゴールの京都を描いています。一方、丸清版は50代の広重が描いた東海道五拾三次です。2つの作品の制作にはおよそ16年の開きがあり、同じ宿場を描いても関心が変わってきているふたつの作品を比較することができます。また、江戸時代の旅の様子や当時の服装、習慣などが絵を通して知ることができます。

主査(学芸員) 武田 正哉



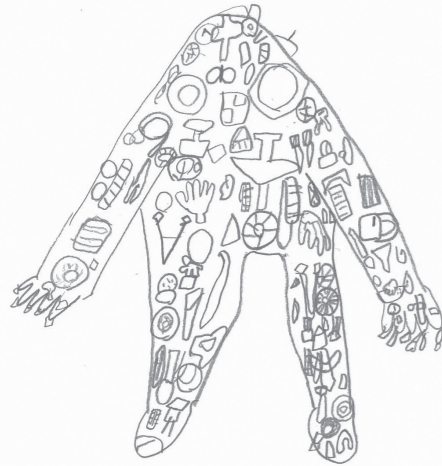
おおもりきし 大森記詩「-Training Day-」

2018年5月5日～9月17日

プラモデル？

「Training Day (トレーニングデイ)」という展示をしていた。それは、とても不思議だった。実は、その人形のようなものは「プラモデル部品から作られたプラモデル」だった。

(小川さくら)



(イラスト：阿部多香子)

おなじポーズをしてみると…

中庭に展示されていたプラモデルからつくられた作品とおなじポーズをしてみました。少しえらくなかった気がしました。そのプラモデルに使われている部品が戦いでつかわれる武器などがありました。少しふしぎな作品もありました。

(阿部多香子)

特集展示

やすだよ 安田葉「WIND BIRDS」

2018年7月14日～9月24日

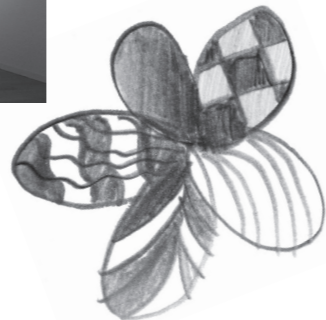
安田葉《予告の種》

光っているわた毛や、こけなどがガラスの入れ物に入っていたりして、その世界みたいに感じました。きれいでした。

(阿部多香子)



(イラスト：阿部多香子)



びとこま

ぶいんしょうかい 部員紹介

Q「お気に入りの服は？」

阿部多香子 → 綿貫里咲
綿貫里咲さんのお気に入りの服は、パーカーなんです。そのパーカーは、こん色で、スヌーピーが描かれています。「好きな理由は動くのだから」と言っていました。

Q「地球が滅亡する前に食べたいものは？」

綿貫里咲 → 阿部多香子
マクドナルドのハンバーガー。おいしいから。

Q「最近上手くなったことは？」

綿貫里咲 → 小川さくら
一年生をむかえる会。こういうこともめめいようになど、自分達でオリジナルの話を作った。

Q「母の日は？」

小川さくら → 深澤乃愛
お手紙をわたしたそうです。お母さんは、よろこんでくれてうれしそうだったそうです。

Q「行ってみたい国は？」

阿部多香子 → 深澤乃愛
深澤乃愛さんの行ってみたい国は、アメリカなんです。アメリカに行ったら、デイズニーランドに行って、スプラッシュマウンテンにのりたい」と言っていました。他には、大きなハンバーグが食べたいんです。

Q「びとこまをはじめた理由、続けている理由」

阿部多香子 → 藤沢レオ
藤沢レオさんは、美術館の楽しさを伝えたいから「びとこま」をはじめたんだそうです。続けている理由は、みんなで新聞を作るのが楽しいから、と言っていました。「一人で新聞を作るときは一人のアイデアだけど、みんなで作るときは、みんなちがう考え方だから、人の考えを知れる」とも言っていました。

Q「最近怒られたことは？」

深澤乃愛 → 千葉和魂
最近怒られたことは、ノリをきたなくはってしまった事だそうです。和魂さんは、不器用だと言っていました。どんな場面できたなくはったかと言うと、紙にレシートをはる時だったそうです。たくさんノリをつけすぎたせいで紙がグニャグニャになってしまったそうです。しかし、和魂さんは、ノリのせいばかりではないとおっしゃっていました。また、はさみで真っすぐ切れなかったこともあるそうです。それは、自分が不器用だったせいだと言っていました。